

受難節第4主日礼拝説教「ここにいるのはすばらしい」予稿  
日本基督教団石神井教会 2017年3月26日

【旧約聖書日課】出エジプト記 24章3～11節

<sup>3</sup>モーセは戻って、主のすべての言葉とすべての法を民に読み聞かせると、民は皆、声を一つにして答え、「わたしたちは、主が語られた言葉をすべて行います」と言った。<sup>4</sup>モーセは主の言葉をすべて書き記し、朝早く起きて、山のふもとに祭壇を築き、十二の石の柱をイスラエルの十二部族のために建てた。<sup>5</sup>彼はイスラエルの人々の若者を遣わし、焼き尽くす献げ物をささげさせ、更に和解の献げ物として主に雄牛をささげさせた。<sup>6</sup>モーセは血の半分を取って鉢に入れて、残りの半分を祭壇に振りかけると、<sup>7</sup>契約の書を取り、民に読んで聞かせた。彼らが、「わたしたちは主が語られたことをすべて行い、守ります」と言うので、<sup>8</sup>モーセは血を取り、民に振りかけて言った。「見よ、これは主がこれらの言葉に基づいてあなたたちと結ばれた契約の血である。」

<sup>9</sup>モーセはアロン、ナダブ、アビフおよびイスラエルの七十人の長老と一緒に登って行った。<sup>10</sup>彼らがイスラエルの神を見ると、その御足の下にはサファイアの敷石のような物があり、それはまさに大空のように澄んでいた。<sup>11</sup>神はイスラエルの民の代表者たちに向かって手を伸ばさなかったのので、彼らは神を見て、食べ、また飲んだ。

【使徒書日課】ペトロの手紙二 1章16～19節

<sup>16</sup>わたしたちの主イエス・キリストの力に満ちた来臨を知らせるのに、わたしたちは巧みな作り話を用いたわけではありません。わたしたちは、キリストの威光を目撃したのです。<sup>17</sup>荘厳な栄光の中から、「これはわたしの愛する子。わたしの心に適う者」というような声があって、主イエスは父である神から誉れと栄光をお受けになりました。<sup>18</sup>わたしたちは、聖なる山にイエスといたとき、天から響いてきたこの声を聞いたのです。<sup>19</sup>こうして、わたしたちには、預言の言葉はいつそう確かなものとなっています。夜が明け、明けの明星があなたがたの心の中に昇るときまで、暗い所に輝くともし火として、どうかこの預言の言葉に留意してください。

【福音書日課】マタイによる福音書 17章1～13節

<sup>1</sup>六日の後、イエスは、ペトロ、それにヤコブとその兄弟ヨハネだけを連れて、高い山に登られた。<sup>2</sup>イエスの姿が彼らの目の前で変わり、顔は太陽のように輝き、服は光のように白くなった。<sup>3</sup>見ると、モーセとエリヤが現れ、イエスと語り合っていた。<sup>4</sup>ペトロが口をはさんでイエスに言った。「主よ、わたしたちがここにいるのは、すばらしいことです。お望みでしたら、わたしがここに仮小屋を三つ建てましょう。一つはあなたのため、一つはモーセのため、もう一つはエリヤのためです。」<sup>5</sup>ペトロがこう話しているうちに、光り輝く雲が彼らを覆った。すると、「これはわたしの愛する子、わたしの心に適う者。これに聞け」という声が雲の中から聞こえた。<sup>6</sup>弟子たちはこれを聞いてひれ伏し、非常に恐れた。<sup>7</sup>イエスは近づき、彼らに手を触れて言われた。「起きなさい。恐れることはない。」<sup>8</sup>彼らが顔を上げて見ると、イエスのほかにはだれもいなかった。<sup>9</sup>一同が山を下りるとき、イエスは、「人の子が死者の中から復活するまで、今見たことをだれにも話してはならない」と弟子たちに命じられた。<sup>10</sup>彼らはイエスに、「なぜ、律法学者は、まずエリヤが来るはずだと言っているのでしょうか」と尋ねた。<sup>11</sup>イエスはお答えになった。「確かにエリヤが来て、すべてを元どおりにする。<sup>12</sup>言うておくが、エリヤは既に来たのだ。人々は彼を認めず、好きなようにあしらったのである。人の子も、そのように人々から苦しめられることになる。」<sup>13</sup>そのとき、弟子たちは、イエスが洗礼者ヨハネのことを言われたのだと悟った。

## 「わたしたちがここにいるのはすばらしいこと」

わたしどもが皆さんと共に歩ませていただくようになって一年のときが過ぎようとしています。一年前にわたしどもを迎えてくださった皆さんと、迎えられたわたしどもが、それぞれの立場で、良くも悪くも、お互いに対する思うところを露わにされてきた一年だったのではないのでしょうか。この、牧師交代ということのを機に、他の教会に移られた兄姉もありました。このときに、石神井教会に対する気持ちが途切れてしまうという思いを持たれた方もあったのではないのでしょうか。そうであっても、この一年、わたしたちは、途切れることなく日曜日ごとに、ここに集められ、礼拝に加えられてきたのです。多くの皆さんが、それまでと何ら変わることなく、ここで主日ごとに教会の営みとして執り行われる礼拝に、あずかり続けてくださっている。今日も、そのような礼拝の営みに連なる者とされた皆さんが、ここにいらっしゃる。そのような礼拝者の群れの中に、わたしどもも立たせていただいている。それは、何とすばらしいことでしょうか。

日曜日の教会から送り出された皆さんは、それぞれに与えられたところで月曜日から土曜日までの歩みを重ねられ、その六日の旅路を終えられて、再び、主の日の教会の営みへと集められていらっしゃいます。多くの皆さんが、だれかと約束したわけでもなく、日曜日には教会の営みへとおいでになられていることでしょう。「それが習慣になっているから」とおっしゃる方もあるかもしれません。あるいは、「責任があるから」といった思いでいらっしゃっている方もあるかもしれません。けれども、皆さんがどのような思いであるとしても、皆さんは、日曜日の朝、皆さんを教会の営みへとお連れしようとなさるお方に連れられ、導かれて、ここに加えられていらっしゃるのではないのでしょうか。

皆さんの中には、ここにいらっしゃるに際して、どなたかにお送りいただいている方がいます。お送りくださる方、お連れくださる方は、ご家族のこともあれば、お仕事やボランティアとして、そうしてくださっている方もあるようです。いずれにしても、それは本当に貴いことです。お連れくださる方の働きがなければ、ここにおいでになることができない方が、確かにいらっしゃるのです。

本当のところ、わたしたちは皆、お連れくださる方の働きがなければ、ここに来ることはできなかったのではないのでしょうか。今日の福音書で、弟子のペトロとヤコブとヨハネが、主イエスに連れられて高い山に登ったように。

わたしたちは、ここで、お互いの姿を見ます。皆さんの立場からすれば、何よりも牧師や伝道師の姿をご覧になられる。けれども、わたしたちは、本当はここで、主イエスのお姿を見ているのです。主イエスの輝くお姿です。旧約聖書のモーセとエリヤと語り合われているお姿です。わたしたちは、日曜日の朝、教会の営みへと導かれてきて、連れて来られて、そのような主イエスのお姿を見る者とされている。ここで、そのお姿を見るようにされている。わたしたちが日曜日の教会で経験する本当にすばらしいことは、誰をも唸らせるような説教とか、大きな讃美の歌声とかではなくて、どういうわけかここに連れて来られて、ここで主イエスのお姿を見る者とされているということ、なのではないのでしょうか。

## 「これはわたしの愛する子」

高い山の上で光り輝く主イエスのお姿を見ることになったのは、ペトロたち三人の弟子たちだけでした。三人だけが、そのとき、主イエスに連れられて高い山に登っていたのです。他の弟子たちは、どういうわけか、連れて行ってもらえなかった。三人の弟子たちも他の弟子たちも、日々、主イエスと寝食を共にしていたのです。そのような生活を、どれだけ続けてきていたことでしょうか。主イエスが弟子たちを伴って活動なさった公生涯は足掛け三年ほどと言われていますから、少なくとも一年以上は、すでに生活を共にしてきていたでしょう。弟子たちは皆、主イエスのことを、良くも悪くも、知りすぎていたかもしれません。そういう弟子たちの中から、なぜ三人だけが選ばれた、というのでしょうか。

あるいは、こういうことかもしれません。この出来事を物語る福音書は、冒頭で「**六日の後**」と告げています。「六日の後」とは、一週間後の同じ曜日の日を指す言い方です。主イエスと弟子たちは、安息日の土曜日か、あるいは翌日の日曜日か、分かりませんが、毎週決まった曜日の営みがあったのです。おそらく、祈りの営み、礼拝の営みです。弟子たちは皆、そのような営みに加えられていた。もちろん、それ以外の日も、弟子たちは主イエスと生活を共にしていました。祈りの営みの日だろうと、それ以外の日だろうと、弟子たちにとって、主イエスは変わらぬ一人の人です。主イエスが礼拝の営みを導いてくださるときにも、その主イエスは、普段からよく知っている主イエス以外の何者でもなかった。ところが、そのような礼拝の営みに加えられる経験をする中で、三人の弟子たちだけが、あるとき、特別な霊的な経験をしたのです。祈りを導いてくれている主イエスが、普段からよく知っている主イエスの姿とは違う姿に見え始めた、という経験です。そこに見え始めたのは、普段の、自分たちと何も変わらない三十路男の姿ではなくて、神々しい光に包まれた姿です。そのとき、光り輝いて見えた主イエスは、旧約聖書を説き明かして、あたかもモーセやエリヤと語らわれているかのようにお話しくださっていた。そのような姿の主イエスが見え始めたのは、しかしながら、三人の弟子たちだけだった。そういうことだったのではないのでしょうか。

実際にそのとき何が起こったのか、これが事実としてどのような出来事だったのかは、分かりません。けれども、この出来事を伝えたのは、ペトロたちです。ペトロは、この経験を、自分たち三人だけが特別に選ばれた者だということを主張するために、あるいはそのことを誇ろうとして、語ったわけではないでしょう。ペトロは、わたしたちが、確かに威光に満ちた主イエス・キリストのお姿を見ることができるということを知ってほしくて、この出来事を伝えたのです。何よりも、あの天からの声、「これはわたしの愛する子。わたしの心に適う者」という御声の響きが伴った出来事として、伝えたのです。

その御声は、主イエスが洗礼を受けられたときに天から響いた御声です。ペトロは、それを知っていました。主イエスから聞いていたのでしょうか。それは、主イエスから「すべての民に洗礼を授けなさい」と命じられたときにもあわせて聞かされていたに違いない、天からの御声だったのでしょうか。

## 「起きなさい。恐れることはない」

皆さんの多くはすでに洗礼を受けられています。洗礼式のことをどれほど憶えているでしょうか。洗礼式で必ず告げられることがあります。洗礼を授けられた者は、新しく生まれて神の子とされたものだ、ということです。祈りの言葉として、あるいは宣言の言葉として、洗礼に際して必ず告げられることです。

ペトロはあまり強調しないようですが、使徒パウロは、わたしたちが、「キリスト・イエスに結ばれるために洗礼を受けた」（ローマ 6:3）こと、そのわたしたちは、キリストと共に「神の子」とされているのだ、ということ強調します。洗礼によってキリストと結ばれた者は、そのとき、あの主イエスが洗礼を受けられたときに天から響いたのと同じ御声、「これはわたしの愛する子、わたしの心に適う者」という御声の宣言を聞かせていただく者だ、ということです。

しかし、そう言われると、困った顔をされる方がありません。それどころか、あの高い山の上でこの御声を聞いたペトロのように、恐れを感じる方もありません。確かに、恐れ多いことです。わたしたちが、洗礼を受けたというだけの理由で、神の子と呼ばれ、主イエスと共に神から「あなたはわたしの心に適う者」とまで言われているのだとしたら、わたしたちは、それに耐えられるような中身が伴っていないことを白状しなければいけないでしょう。今からでも、洗礼を返上して求道者からやり直すことにしなければ、かえって主イエスを信じる皆さんに迷惑をかけてしまう、と思うかもしれません。

けれども、高い山の上で恐れおののいたペトロでしたが、彼は、手紙の中で言うのです、「どうかこの預言の言葉に留意してください」と。洗礼を受けたときに授けられるこの天からの御声、「あなたは神の愛する子」という御言葉を、心に留め続けてほしい、とペトロは、わたしたちに勧めるのです。なぜならば、高い山の上で恐れおののいたペトロでしたけれども、そのとき、主イエスは、ペトロに触れて、「起きなさい。恐れることはない」と顔を上げさせてくださったのです。立ち上がらせてくださったのです。ペトロは、洗礼を通して、主イエスと共に死に、共に復活する者とされることを、知るようになったのです。

皆さん。だから、ここにいるのはすばらしいことなのです。わたしたちは、ここで、太陽のように顔が輝き、服が真っ白く光る主イエスのお姿を、見ているのです。洗礼によって主イエス・キリストと結ばれた人たちの中に、そのお姿を見る者とされているのです。そこにいるのは、普段見慣れたあの人かもしれません。けれども、主イエスは、今日、その人の姿が変わるところに、お連れくださっているのです。主イエス・キリストの光を帯びた姿に変えられた人の姿を、わたしたちは、ここで見させていただいているのです。六日の旅路の後に主イエスがお連れくださるところで、わたしたちは、互いのうちに、神の子の光を帯びた姿を見させていただいているのです。わたしたちが、そのようなところにいさせていただけるとは、なんとすばらしいことでしょうか。

主イエスは、しかし、山を下られます。神の子として神のご計画に用いられる場所。それは、山の上だけでなく、むしろ山の下に備えられているからです。